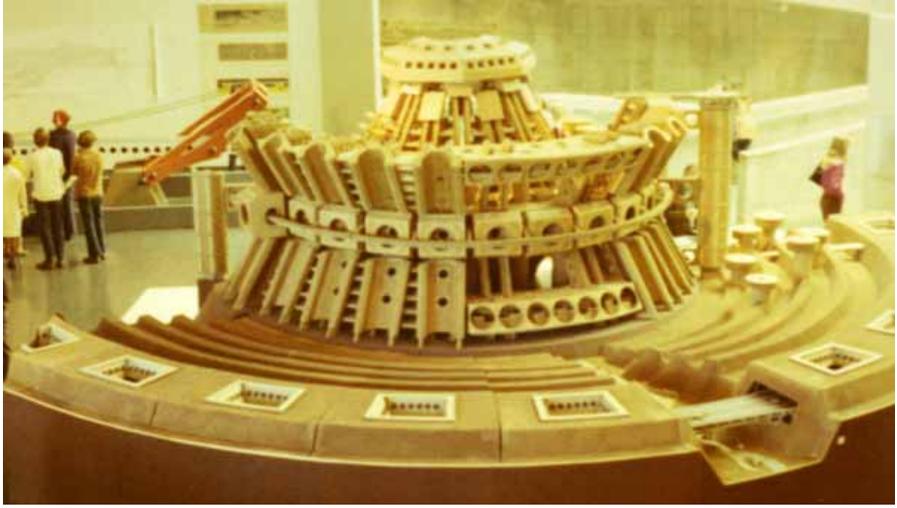


6 未来へのフロンティア、 カリフォルニア



ポール・ソリル未来都市の模型、
U.C.バークレー大学でのエキスポ、1971年

6.1 ロスアンゼルスと SOM

1980年1月に、ロスアンゼルスに引越することになった。今回の移動は楽である。仕事は決まっているし、引越しもSOMがしてくれる。私は途中の街や建物を見ながらカリフォルニアへ行けばよいのである。テキサスからカリフォルニアへ移動してゆくルートは、かつてカウボーイ達がゴールドラッシュの時代に食料調達のために沢山の牛をテキサスの牧場からゴールドラッシュに沸くカリフォルニアに移動させていた、あのルートと似たコースである。

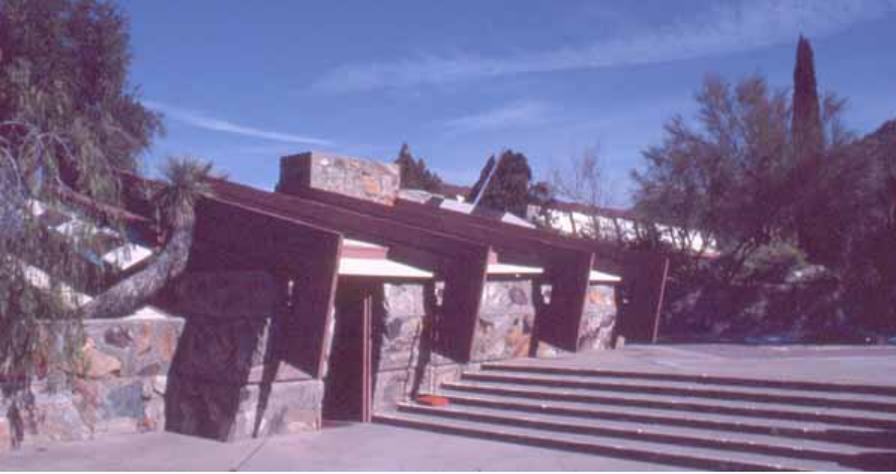
カリフォルニアに行く途中にちょっと寄ってみたい所があった。それは、建築家ポール・ソリレがつくっている小さな宇宙的な建築都市のアルコサンテとフランク・ロイド・ライトがつくった建築学校タリイセンウィストである。それらはアリゾナ州のフィニックスの近くにあった。この辺は冬でも、大変暖かい所である。

ポール・ソリレの作品を始めて見たのは、最初アメリカに来た1971年、バークレー大学の近代美術館だった。未来の建築や都市をイメージした円や半円の幾何学的な形をフルに使ったデザインであった。展示されてあった巨大な木工の模型と大きなカラフルな図面には大変圧倒された事を思い出す。彼は、それを縮小した様な建築を、アルコサンテに建てているのである。SOMの友人のスティープも何年か前にここで学び、働いていたという。徒弟制度のある空想的な建築の世界であるという。建築と社会生態学を一体にするということで彼はアコロジー（Archogy）という言葉をよくつかっていた。こんな砂漠の中だからこそ、未来とか宇宙的なイメージの建物がうまくあてはまるのかもしれない。思った程、建物は大きくなく、ほとんどがコンクリート造りで、建築やアートの学生、ボランティアの若い建築家達が働き学んでいた。ポール・ソリレは自分のファンタジーの世界をつくっていた。

タリイセンウィストもアリゾナ州の砂漠の様な地域にあった。1939年頃から、フラ

ポール・ソリル未来都市、アルコサンテの工事現場1980年、フィニックス、AZ。
一人の建築家が自分の夢を創り、それを現実の建築として、コツコツと一つの世界を創り上げていくことはす晴らしことだと思った。これも歴史の一コマとして残るのだろうか。





タリイセンウエスト、F.L. ライト設計1939年、フィニックス、AZ。かつては闘志に燃えた若い建築家の修業の場であったのだろうが、私には今は、時代にとり残された職業訓練所ぐらいに見えなかった。

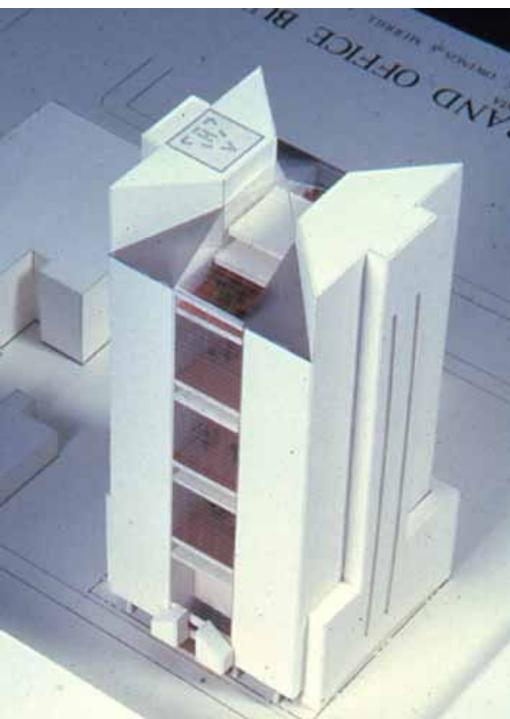
ンク・ロイド・ライトが作り始めた徒弟制度の学校である。ポール・ソリレもかつてはここで学んだことがあるという。この建物は、オーガ

ニックアーキテクチャーというか、ほとんどが木と石を使って地面に這い蹲る様につくられていた。近くに見える木のない山々にうまくマッチしている。こちらの建築は自然と一体となっている感じがした。しかし、メンテナンスが十分でないのか、強烈な太陽の光や熱によってか、だいぶ木造の建物は傷んでいた。近くの新興住宅地には、徒弟制度の学生達によって設計されたのか、プレースタイルの住宅が沢山建てられていた。壮年の建築家がフランク・ロイド・ライトのデザインコンセプトを受け継いで学生達に教えていた。SOMで働いているクレグもこんな建築の学校をつくることを夢見ているのだろうか？私は、この様なことをしていたら何か時代に取り残されていく気がした。建築とは、今の、そして、未来への文化の一端としての建物をつくるのであるから、常に歴史を理解し現実を見極め、何か新しいスタイルの物を創っていかなければいけないと私は思っている。カリフォルニアには、何か新しいものが私を待っているような気がした。

現代のカリフォルニアも、またあのゴールドラッシュの時代と同じ様に、ビジネスのゴールドラッシュといわれるようなブームが起きる様な気がしてならない。

ロスアンゼルスに着いた。10年前にサンフランシスコから仕事を探しに来たことを思いだした。あの時とはなぜか全然違うロスアンゼルスに来た感じがした。SOMの事務所に着いたことを報告しアパート探しを始めた。ロスにはアパートの供給は少なく、住居費はヒ

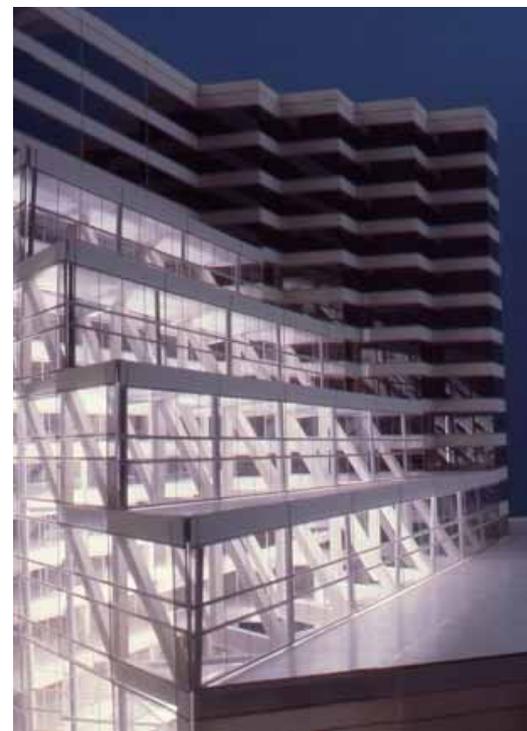
4階吹き抜けのロビーとしてのアトリウムが4層重なるグランド・オフィスビル。模型 SOM 設計1981年。私が担当した大変面白いコンセプトであったが設計の途中で中断した。



ューストンに比べて倍くらいほど高かった。とりあえずハリウッドに、アパートを借りた。

SOM のロスアンゼルスのオフィスはサンフランシスコのオフィスの支所としてつくられ、マネージメント・パートナーは、サンフランシスコの SOM のオフィスから、そしてデザインパートナーはシカゴから送られてきていた。スタッフはシカゴから来た人達と、ロスアンゼルスで雇われた人達であった。デザインパートナーのマリス・パイカは、シカゴの SOM のオフィスで、四角や三角の幾何学的なカタチを用いてを設計する個性の強い有名なウォルター・ネッチというデザイン

ブロードウィーブラザ、SOM 設計1982年。オフィスビルとショッピングセンターを段々状のアトリウムでわけた。このプロジェクトも私が担当したが設計の途中で中断した。





ゲートプラザ、SOM 設計1982年、36建てのひし形のタワーと6層段々状の駐車場。



ゲートオフィスビルと私が担当した駐車場をつなぐキャノピー。重い御影石で造られたキャノピーが宙に浮いている。

パートナーの下で働いていた建築家である。

マリスも同様にグリッド、モジュール、それに幾何学的な線を強調して平面図を描いていた。私は彼の下で働くことになった。高層の事務所建築が多く、しかし、彼とはデザインの上で意見が合わることが多かった。それでも私はよく働いた。私はデザインのことははっきり主張する方なので、マリスには気に入られたのか、デザインについてよく議論をした。彼は私のアイデアを受け入れ納得した、私の担当するプロジェクトに使用せず、他のプロジェクトに私のアイデアを使用していた。他のシニア・デザイナー達は彼とあまり議論しなかった。彼等は、マリスのコンセプトに沿って設計していた。マリスのようなチーフデザイナーは彼をサポートしてくれ



トラバテンの石か御影石の外装にするか大きな模型を作ったプレゼンテーション。

るデザイナーと常に何か新しいアイデアを出してくれるデザイナーが必要であった。彼等に自分の意見がないわけではないが、自分の地位を気にして反論しなかったのだ。SOM のロス

アンゼルスオフィスはまだ新しいこともあって、時々、SOM のシカゴやサンフランシスコから熟年のデザインのゼネラル・パートナーがロスアンゼルスに来て、デザイナーを指導した。そして、デザインのディスカッションがよく行われた。SOM では、年に一度、シニア・デザイナーの討論会の様なものがあった。私がロスアンゼルスに来て2年目に、

ロスアンゼルスSOMを代表して、マリスともう1人のデザイナー



サンアントニオのリバーウォークのマスタープラン、SOM 設計1976年、街の中心を流れる川の両サイドに歩道を作り、古い建物を改造し、市民や観光客に憩いの場所を作った。水際の開発は暑いテキサスの街には大変有意義であった。暖かく、流れがゆるやかなこともあって、モスが生えて緑色の川だった。



我が家からの冬のビュー。夏になる遠くの山はまったく見えなくなる。ロスのこの辺はスモッグと枯れ草でセピア色のランドスケープに変わる。



2階に増築したサンルーム。日差しが強いロスでは日中はこの部屋に入るのにサングラスがいつも必要となった。

と私と3人で、そのデザイナーの討論会に行くことになった。その年の討論会のテーマは集合住宅で、テキサスのサンアントニオで行われた。SOMの各オフィスから全部で50人近くのデザイナーが集まった。

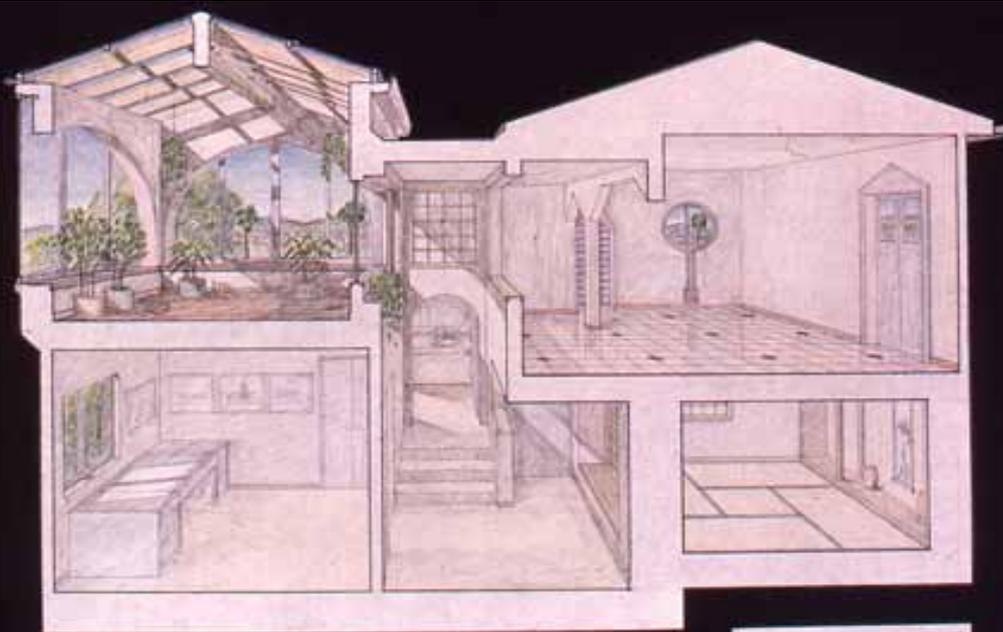
勉強会のミーティングやプレゼンテーションの他に、サンアントニオの有名な建築を視察したりしたが、各オフィスとの繋がりと、デザインの向上を強めることでもあった。

ロスアンゼルスには長く住もうと思っていたので、住む家を買うことにした。いろいろ探した結果、ロスアンゼルスダウンタウンに近い、ハイランドパークという丘の上に建つ家を買うことにした。ハイランドパークの地形は、山波の様ないくつもの丘からなりたっている。私が買った丘の上の家からは、ヨーロッパの小さい街を思わせる様な風景を見渡すことが出来た。丘の上の家々の向こう、はるか遠くには、1500メートル位の高い山々が見えた。夏はスモッグでその遠くの山は、まったく見えなくなることが多い、冬にはスモッグがなく白く雪が被ったその山脈を見ることが出来た。その家は、ドイツ人の移民の芸術家が1930年代に建てた家だった。その後、何人かの芸術家が住みかわった。オーナーが変わるたびに、改装してきたので、建てた当時の面影はあまりなくなってしまったという。

ある時は内壁が、ヨーロッパの中世の壁画だらけになっていた。そんな話を、近所の人が話してくれた。100年以上もたつビクトリアンスタイル家が私の家の前にあった。

我が家の増改築図、ハイランドパーク、LA.1982年。上のフロアーはサンルームとダイニングルーム、下のフロアーは書斎、吹き抜け空間と日本間の断面図。和洋、現代、中世建築のミックス設計。

ダイニングルームに作った円い窓からは遠景だけが見える。



SECTION PERSPECTIVE





我が家、ダイニングルームからリビングルームを見る。この辺は以前のオーナーのオリジナルの建築詳細。



古い暖炉をポストモダン風に改造。全体のほとんどの工作、電気、配管の工事まで、自分の手で建築の模型を作るように仕上げた。

この家は、ロスアンゼルス歴史保存建築物に指定されていた。私は、買った家を増改築することにした。SOMでの設計のフラストレーションをここにはきだした気もする。増改築するにあたっては、実験的にいろいろ試みた。二階に増築した部屋の屋根を全部ガラスにし、外壁は全部ガラス戸にしてサンルームにした。暖炉をポストモダン風に創り変えた。半日本的なバスルームも作った。風呂に入りながら遠くの景色よく見えるようにした。丸い窓も作り、床を切り、吹き抜け空間も造った。裏庭には、カリフォルニア・スタイルの日本庭園、ロックガーデン、枯山水を作り、その庭に、ウッド・デッキを造り、詳細な木造のテーブルとベンチも造った。よく友人達を呼んで、そこでバーベキュー・パーティーをした。その庭からも一望出来る重なった丘の向うに見える山々の眺望はきれいだった。その他のランドスケープもよかった。大きな木が沢山あり秋には黄葉した。また、門から玄関まで長く藤棚が続いていて、その藤の花が咲きほこる5月頃は、紫の花房が垂れ下がり、あたり一面、藤の花の香が漂って、見事なものであった。

生活も仕事も多少マンネリ化し始めた。仕事の上では、相変わらず所長のマリスとのデザインに対する考え方の相違が大きく、フラストレーションがたまっていた。また私の超高層の夢も実現しそうもないし、SOMをやめることにした。しかし、いつか自分の事務所を持ちたかったので、まずは小さな設計事務所で働いて、建築設計に関するいろいろな実務経験を積むことにした。そしてその後、自分の事務所を設立して、仕事を始めよう、と思った。

日本式のバスルームに続く通路。この吹き抜け空間は自然光を入れるだけでなく上下階の視覚的、心理的な繋がりとともにしている。

手作りの枯山水の庭とウッドデッキ。いろいろなフルーツの木や椰子の木や落葉樹があった和洋折衷の裏庭。ここも憩いの場所となっていた。

